



TITLE:

彙報 二〇一四年一月より二〇一五年三月まで

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報 二〇一四年一月より二〇一五年三月まで. 東方學報 2015, 90: 361-377

ISSUE DATE:

2015-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/204485>

RIGHT:

彙報

二〇一四年一月より
二〇一五年三月まで

研究状況

班研究

東方學研究部

近現代中國における社會經濟制度の再編

班長 村上 衛

本年度は三年計畫の三年目にあたるため、來年度に編集を進める研究報告書を見据えた報告を中心に、十五回の研究會を行った。毎回の参加者数は二十名ほどである。本研究班は時代的・テーマ的に廣い範圍を扱うため、中國近現代史研究者のみならず、明清史研究者や現代中國研究者、また人文科學系だけではなく、社會科學系の經濟史研究者に参加していただいている。さらに本年度は東南アジア華人を中心として東南アジア關連の報告が多かったため、東南アジア研究者にもコメントイターとして参加していただいた。いずれの報告に關しても活潑に討論が行われ、報告・討論の時間を合わせて三時間半近くになることも多かった。なお、本研究班では、中國の「制度」に關心をもつ海外の研究者との交流も進めており、本年度はフランス社會科學高等研究院の Xavier

Pauls 氏を招聘して、中國におけるアヘンの流行に關する報告をしていただいた。

* 括弧内はコメントイター

一月一七日 二十世紀前半、長江中洲の開発と開發農民の具體像・南京付近の中洲を中心に
片山 剛（小島泰雄）

一月三二日 總理衙門―北洋大臣李鴻章體制の運用とその創出
荻惠 里子（箱田恵子）

二月一四日 升科、Shengko、Shengkoing：上海フランス租界における黃浦江沿岸埋立地の取得問題
加藤 雄三（田口宏三朗）

四月二五日 中國經濟史研究と現代中國經濟研究のあいだ―通過貿易と天津羊毛貿易を例に
村上 衛（富澤芳亞）

五月 九日 南の島の女たちと商業
岩井 茂樹（村尾 進）

五月二三日 村という制度
小島 泰雄（三品英憲）

六月 六日 20世紀初頭における客家系華商

の擡頭・梅縣・香港・神戸・バダビア 梅縣南口鎮僑郷村潘氏一族を手掛かりに

陳 來幸（植村泰夫）

六月二〇日 入城・駐京・觀見・省城廣州、一八四〇年代
村尾 進（茂木敏夫）

七月 四日 一九〇三年載振・那桐・ブレドンの日本訪問について・日本外務省資料からみた
奚 伶（城山智子）

九月二六日 「保護國」と「招撫」の相剋・越境する華人集團と國際政治
望月 直人（武内房司）

一〇月一〇日 前近代バタヴィアの國際的契機・マニラ、マカオ、マラッカ、そして日本
籠谷 直人（島田龍登）

十一月 七日 近代廣東の醫療機構と地域
蒲 豐彦（飯島 涉）

十一月二九日 The hidden reasons of a success story: opium in China 1800-1906 Xavier Pauls（古泉達矢）
近代中國經濟史の基礎史料を再考する・編纂史料を中心に
金丸 裕一（木越義則）

二〇一五年一月二三日 條約裁判所 Treaty Tribunal の設立・19世紀中葉の中國におけ

る民事紛争解決機構の變遷

西山 喬貴(本野英二)

二月 六日 華北鹽業をめぐる興中公司の活動

動 兒玉 州平(落合 功)

二月二〇日 清末の黄河河道論争について

細見 和弘(大坪慶之)

三月 六日 一九三七年以前の中國旅行社と

上海商業儲蓄銀行について

易 星星(岩間一弘)

雲岡石窟の研究

東方文化研究所が一九三八—一九四四年に調査

した中國山西省雲岡石窟について、中國社會科學

院考古研究所との共同編集により『雲岡石窟』全

二〇卷四一冊を中國の科學出版社から日中兩國で

三期に分けて刊行することになり、毎週開催され

る研究會では水野清一・長廣敏雄「雲岡石窟」の

圖版解説を會讀するとともに、報告書に未収録の

寫眞を整理する検討會を實施した。第一期(第一

卷・第七卷)は日本語版・中國語版とも昨年度に

出版され、第二期(第八卷・第十六卷)の日本語

版は二〇一四年十二月に刊行、中國語版も二〇一

五年中に出版される豫定で、新編集の第三期(第

一七卷・第二〇卷)は二〇一五年三月に出稿し、

二〇一五年度中に出版の豫定である。また、中國

における最新の發掘調査について意見交換をおこ

なうため、中國雲岡石窟研究院の王雁卿氏を招聘

して七月二九日に國際シンポジウム「雲岡石窟研

究の現在 二〇一四」を開催し、王氏の「平城考

古與雲岡石窟」の講演と熊坂聰美氏(筑波大學大

學院)の「曇曜五窟の佛龕」の報告があった。

漢語と周邊諸語の類型構造論 班長 池田 巧

班員を中心に關連分野の研究者に呼びかけ、チ

ベット・ビルマ語と古代漢語の「使役文の類型構

造の諸相」をテーマに研究集會を開催した。また

研究連絡會議では、關西地區のチベット學研究者

の班員が中心となって、チベットの英雄敘事詩

『ケサル王傳』の天界篇の會讀を行なった。

四月二八日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

岩尾一史、西田 愛、

五月二二日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

五月二六日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

六月一六日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

七月 六日 第一回TB十古漢語研究會…漢

藏諸語における使役構文の類型

構造(1)

ギャロン語ヨチ方言における使

役および逆使役の接辭について

西夏語韻書の構成法について 白井 聰子

「清濁別義」と稱される現象に

ついて 戸内俊介、野原將揮

七月一四日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

七月二八日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

九月二九日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

十一月一〇日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

十二月 一日 會讀：『ケサル王傳』 天界篇

二〇一五年一月一九日

會讀：『ケサル王傳』 天界篇

一月二四、二五日

第二回TB十古漢語研究會…漢

藏諸語における使役構文の類型

構造(2)

古漢語における使役表現の變遷

カムチベット語 Sogdia 方言の

使役構文 鈴木 博之

ポー・カレン語の使役と逆使役

カイケ語の使役構文 加藤 昌彦

キナウル語の使役 高橋 慶治

ムニャ語の自他動詞と使役構文

池田 巧

東アジア譯學書の研究

本年度も『朴通事諺解』および『翻譯朴通事』

の會讀を行い、譯注を作成し、全書をすべて讀み

終わり、譯注を完成した。

一月 一日 朴通事六七・六八話

二月 一日 朴通事四四話

三月 一日 朴通事七六・七七話

金 文京

朴通事四五話 木津 祐子

朴通事七五話 玄 幸子

朴通事四四話 木津 祐子

朴通事七六・七七話 玄 幸子

玄 幸子

玄 幸子

玄 幸子

四月二六日 朴通事二二・七九話

田村 裕之

朴通事三四話

竹越 孝

五月一〇日 朴通事四六話

木津 祐子

朴通事七八話

玄 幸子

朴通事一〇三話

佐藤 晴彦

七月二二日 朴通事三〇話

船田 善之

朴通事七〇話

金 文京

朴通事一〇四話

佐藤 晴彦

八月一六日 朴通事三二話

船田 善之

朴通事四七話

木津 祐子

朴通事六九話

金 文京

一〇月二五日 朴通事三七・三八話

竹越 孝

金 文京

十一月二日 朴通事八一話

玄 幸子

十二月 七日 朴通事三六話

竹越 孝

朴通事五一話

奥村佳代子

船田 善之

二〇一五年一月一〇日 朴通事三三話

船田 善之

二月一四日 朴通事一〇六話

佐藤 晴彦

高麗史の基礎問題

張 東翼

人文情報學の基礎研究

班長 ウィッテルン・クリスティアン

本共同研究班(二〇一三年四月〜二〇一六年三

月)は文獻研究が行う人文科學の諸分野、特に東

方學の研究、つまり古典の校正、解讀、注釋、翻

譯等を支援する方法や規格を提唱して、さらにそ

れに基づいた研究支援ツール見本の實装を目指し

ている。そのツールの具體的な機能等は研究進行

と共に明らかにするだろうが、現時点では文字と

してのテキストと畫像テキストの連携、複数の版

本の扱い、テキスト批判、引用文や逸文の檢出、

語彙や實例の檢討、テキストマイニング、テー

マ・ジャンルなどでの絞り檢索などが考えられる。

研究者の需要を再檢討して、テキスト研究に必要

な道具によって二一世紀の人文學研究の基盤を強

化することが本研究の最大の目的だ。具體的な推

進方針として、定期的な例會で研究課題について

の議論を進めて、年に一、二回程度擴張研究會或

は公開講演會という形で研究者コミュニティと

情報交換を行う。二〇一四年度に第二と第四火曜

日開催の例會以外に九月二七日に擴張研究會を開

催した。その時に研究班の班員以外の方も参加し

て頂いて、意見を頂戴した。二〇一四年に前年度

に引き繼いでテキスト研究・編集ツール「マンド

ク」の開発と同時に、テキスト・データベースの

編集や檢索用ウェブサイトの作成も行った。

一月一四日(第十一回) 新し Mandoku preview

一月二八日(第十二回) 漢籍リポ/マンドクのワークフ

ロー

四月二二日(第十三回) マンドクの現状

五月一三日(第十四回) テキスト形式の檢討

五月二七日(第十五回)

テキストの間の關係、内外「リ

ンク」など

六月一〇日(第十六回)

典據データについて

六月二四日(第十七回)

新し Mandoku preview

七月二二日(第十八回)

DH二〇一四報告

九月二七日(第十九回)

擴大研究會

一〇月一四日(第二十回)

檢索方法について

一〇月二八日(第二一回)

新しいメンバーの研究プロジェ

クト紹介

十一月二五日(第二二回)

Mandoku installerについて

十二月九日(第二三回)

マンドク インストラー

二〇一五年一月一三日(第二四回)

マンドク インストラー/

パッケージ

一月二七日(第二五回)

漢籍目錄について

二月一〇日(第二六回)

gnupack / IIF | International

Image Interoperability Frame-

work

術數學—中國の科學と占術 班長 武田 時昌

科學・占術が思想文化、宗教文化とどのように相互關連するかについて検討し、術數學の研究の場を明確にし、學問的輪郭や理論構造の特色を多角的に考察した。取り組んだ主要な研究テーマと考察内容は以下の三つの事項に大別できる。(1) 死生觀、自然觀や身體論の形成に關する道教文化の影響・神仙思想や道教の研究者を招聘して特別講演會を開催し、魂魄觀、修養法(内丹)、仙藥(外丹)、呪法等について醫藥書、術數學との關連性をめぐって討議した。(2) 先秦方術から中世術數學への變容過程・馬王堆出土帛書『刑德』『式法』『陰陽五行乙篇』等を會讀し、占術理論の數理的考察を行い、その方面の國內外の研究者を招いて特別講演會を開催した。(3) 術數學に理論基盤を提供した漢代象數易(とりわけ京氏易)の中世、近世的展開・『卜筮元龜』を會讀し、『火珠林』『斷易天機』等の關連文獻と比較しながら近世に流行した斷易の數理構造を分析し、その理論基盤について週及的考察を行った。また、彦根市博物館琴堂文庫所藏占術書を調査し、目錄データベースを作成した。

一月一日 朱熹における魂魄觀

二月一日 舊鈔本『論語義疏』の傳本並びに日本古代に於ける『論語義疏』受容の歴史 白雲 飛 高田 宗平

三月二十八日 術數學東京ミーティング二〇一四

納音數理考 武田 時昌

二十歳刑德と刑德七舍の刑德運行之について『淮南子』天文訓と出土資料との比較を通じて

小倉 聖

浙江大『左傳』に認められる科斗文字について 小澤 賢二

『尚書中候』初探 伊藤 裕水

劉師培の義例觀と劉氏家學—

『春秋左氏傳舊注疏證』を中心として 田 訪

黃圖琬『看山閣集』にみる乾隆前期の室内陳設 高井たかね

フランス國立圖書館藏天文圖初探 鄭 宰相

雪見御所(平清盛邸)の立地と三合方術 曾我とも子

明末清初の産業技術書について 森村 謙一

胡平生先生特別講演會(古算書研究會との共催)

胡平生氏、阜陽漢簡を語る—

『說類雜事』『莊子』『算術書』等 胡 平生

敷内清先生追悼研究集會二〇一四

中國における近代地質學の受容とその源 武上眞理子

トルクメニスタンにおける染織

技術の傳統

九月 六日 ヌルマドワ・ズレイハ 日本に流入した戰國楚簡と春秋青銅器 小澤 賢二

「日書」研究からみえてきたもの 工藤 元男

術數學國際ワークショップ二〇一四—十一(日本道教學會との共催イベント)

天理參考館が所藏する中國の宗教民具—年畫を中心として 中尾 徳仁

訪中歴三〇年 道教踏査の日々を語る 奈良 行博

座談會「生い立ちから語り、道教の疑問に答える」 吉 宏忠、姚 樹良、尹 志華

(司會 土屋昌明)

一一月一六—一九日 復旦大學出土文獻與古文字研究中心青銅器調查グループとの國際ワークショップ

座談會 出土簡帛研究の最前線—整理情況とデータベース化 劉 釗

(コメンテーター 郭永秉、張傳官、謝明文、廣瀨薫雄、司會 武田時昌)

一二月一〇日 術數學國際ワークショップ二〇一四—十二(日本道教學會、大

阪府立大学人文学会二〇一四学
術研討會との共催)

形與眞・道教の形、論思想述要

蔡 林 波

座談會 道教研究の新展開

姜 生

(コメンテーター 三浦國雄、

大形徹、司會 武田時昌)

一二月二一日 『淮南萬畢術』の思想的考察

有馬 卓也

二〇一五年三月二二日

術數學研究会・占術讀解ワーク

シヨップ

馬王堆漢墓帛書『陰陽五行』甲

篇「諸神吉凶」綴合校釋

名和 敏光

漢語彙辭典の出版

班長 富谷 至

最終年度にあたる本年度は、報告書の作成と校

正作業を行った。まず年度前半を、報告書の一冊

である「事項考證篇」の内容報告と検討に充てた。

後半は、「事項考證篇」と「辭書篇」の校正方針

を定め、各人が校正中に気づいた箇所を修正・補

充した。二〇一四年末に「事項考證篇」の校正は

終了、二〇一五年一月末に「辭書篇」の再校を行

う豫定である。二〇一四年度の担当者はこの通り

である(排列は擔當順)。藤井律之、吉村昌之、

辻正博、大川俊隆、鷺尾祐子、井波陵一、森谷一

樹、杉本憲司、富谷至、宮宅潔、佐藤達郎、鷺尾

祐子、鷹取祐司、門田明。また、班員による研究

報告、および、招へい外國人學者・招へい外國人
研究員による講演も行った。

六月二七日 寧波と日本 劉 恒武

一〇月一〇日 戰國時代の巡狩説話 李 成九

一月 七日 A 告B 謂C 鷹取 祐司

東アジア古典文獻コーパスの應用研究

班長 安岡 孝一

本共同研究班の前身である「東アジア古典文獻

コーパスの研究」共同研究班では、Macabを用

いた古典漢文の形態素解析にチャレンジした。こ

の共同研究は、まずまずの成果を収めたのだが、

それは一方、形態素解析というものの限界を示す

結果となった。すなわち、同一の單語が複数の用

途に用いられている場合、それらの違いは、形態

素レベルでは單純に解析できないのである。この

問題にさらに挑戦すべく、本共同研究班「東アジ

ア古典文獻コーパスの應用研究」を組織した。な

お、本共同研究班では、参加者全員が文獻や書籍

を見ながら論じ合うというスタイルを取っている

ため、特定の發表者等は記さないことにする。

四月一八日 平成二六年度の研究計畫書議論、

DH二〇一四發表準備

五月一六日 CHSEWIDにおける中國語形

態素用例

六月 六日 品詞分類再検討

六月二〇日 CHSEWIDの一字地名と

『中國古今地名大辭典』

七月 四日 CHSEWIDの一字地名と

『中國古今地名大辭典』
DH二〇一四報告

七月一八日

八月 八日 『中國古今地名大辭典』の検討

八月二三日 じんもんこん二〇一四 發表準備、品詞分類、(八月二二日版)

制作

九月二二日 じんもんこん二〇一四 アプス

トラクト完成

一〇月一七日 じんもんこん二〇一四 投稿原

稿作成、品詞分類(一〇月一七日版)制作

一一月 三日 じんもんこん二〇一四 投稿原

稿作成

一一月 七日 じんもんこん二〇一四 投稿原

稿完成

一二月二二日 じんもんこん二〇一四 發表準備

一二月 五日 漢文コーパス簡易檢索作成、

『中國語コントロール構文の解

析』『述部意味關係コーパスの

構築』検討

二〇一五年一月一六日

二〇一五年一月一六日 じんもんこん二〇一四 報告

「姓氏」と「名」の検討

二月 六日 二〇一四年度研究活動まとめ

東アジア近世の地域をつなぐ關係と媒介者

班長 岩井 茂樹

課題についての研究報告をおこなう研究會を計

九回開催したほか、研究班のサブグループによる

『道咸宦海見聞録』の會讀をおこなった(計二回)。これは一九世紀に翰林官および地方官僚を歴任した張集馨(一八〇〇年―一八七九年)が遺した自編年譜および日記からなる史料である。會讀にさいしては電子テキストを作成し、その校訂作業を併せておこなっている。

二月二〇日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
三月 六日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
三月二〇日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
四月一日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
四月二五日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
五月 九日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
五月二三日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
六月 六日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
六月二〇日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
七月 四日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
七月一八日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
九月一二日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人

九月二六日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
一〇月 七日	中國民間文獻の収集と整理	鄭 振滿
一〇月一〇日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
一〇月二四日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
十一月 七日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
十一月二八日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
十二月 五日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
十二月一九日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
十二月二三日	清朝巴縣の「抗租」と「騙租」…中國傳統租佃關係について再検討	凌 鵬
二〇一五年一月九日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
一月一三日	清末巴縣の徵稅請負と訴訟・調解…特に抬墊をめぐる	小野 達哉
一月二三日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
一月二七日	牙行による交易仲介機能とその	城地 孝、望月直人

二月 六日	『道咸宦海見聞録』會讀	岩井 茂樹
二月一〇日	一七五一年南部藩釜石商船漂流と外交文書、銀牌	岩井 茂樹
二月二〇日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
二月二四日	明末の弓術書『武經射學正宗』とその周邊	城地 孝
三月 六日	『道咸宦海見聞録』會讀	城地 孝、望月直人
三月 九日	萬曆朝鮮出兵にみる地域間關係	萬曆二〇年代明朝の封倭政策と九卿・科道會議
	(コメンテーター、城地 孝)	三木 聰
	萬曆の倭寇と朝鮮の嚮導―明から見た文祿慶長の役	山崎 岳
三月一〇日	海禁と貿易をめぐる東アジア國際關係	岩井 茂樹
	貿易と海禁―通交における統制・自由問題	橋本 雄
三月一一日	近世日本海禁論の前提を問う	岩井 茂樹
	人の往來・情報傳播	應仁度遣明船と雪舟入明再考―雪舟は、なぜ入明したのか／できたのか?
		橋本 雄

人文學研究部

日中戦争・アジア太平洋戦争期朝鮮社會の諸相

班長 水野 直樹

二〇一四年度は九回の研究会、一回のワークショップ（二〇一五年二月開催）を開催した。研究発表、資料紹介、書評など、計二十三の発表を行ない、質疑応答、情報交換を通じて、問題意識、視點、資料解釋などに關して活潑に討論した。特にワークショップでは、韓國から中堅研究者二名を招いて、戦時期朝鮮社會の狀況に關する新たな研究狀況や新たな資料について紹介してもらい、日韓の歴史研究者の交流と相互討論を圖つた。これらの研究発表により、戦時期の朝鮮社會についての新たな見方や新たな問題設定を進めることができた。

近代天皇制と社會

班長 高木 博志

「天皇」個人や「天皇像」、あるいは單なる政治過程でなく、天皇制を國家や社會とのかかわりで考える問題意識をもつて、研究会を積み重ねた。十一回の研究会では、天皇制をめぐって、陵墓・遙拜所・地域の軍隊・美術など多様な問題を扱うとともに、地域社會における「開化」の拒絶/受容をめぐる論點、朝鮮の東學黨へのジェノサイドや御眞影のありようの内地との差異についてなど、幅廣い議論がもたれた。七月二六―二七日には、金澤において、金澤地域の明治維新や軍隊をめぐるテーマの研究報告がもたれ、金澤近郊の行在所跡や師團跡をめぐる巡見をおこなった。さらに九月二〇日には佐紀古墳群（奈良市）を考古學者の

今尾文昭氏の案内で、陵墓のあり方を介して古代から現代まで「天皇制と地域社會」について研究した。九月一〇日には、公開の國際研究集會として徐興慶氏による近世から近現代を見通す日中交流史の報告を得た。

トラウマ經驗と記憶の組織化をめぐる領域横斷的研究・物語からモニュメントまで

班長 田中 雅一

本年度は、五年間續いた本研究會の最終年度であるため、四月に代表者の田中が、四年間の總括と論文集の構成を提案した。またイスラエルからの研究者を招聘し、パレスチナとイスラエルとの和解の問題、イスラエル國民にとつての集合的な經驗について議論を深めた。前期は、執筆豫定となる成果論文についてアンケートをとり、全體の構成について議論を重ねた。後期に研究会を開催し、これまで発表していない執筆業者や、発表内容と異なるテーマで執筆を豫定しているメンバーについて発表を依頼した。これは十一月と三月に行つた。また、總合地球環境學研究所のプロジェクトと連携して國際ワークショップを十月に開催した。

アジアの通商ネットワークと社會秩序

班長 籠谷 直人

本年度は三年計畫の三年目にあたため、來年度に編集を進める研究報告書を見据えた報告を中心に、計五回の研究会を行なつた。毎回の参加者は、十五名ほどである。この最終年度も、第一年度、第二年度より引き續き、華僑華人らの公文書

であるバタヴィア華僑華人公館の『公案簿』や『開吧歴代史紀』などの諸文書史料について検討をすすめた。『開吧歴代史紀』は、華人がのこした「バタヴィア開發史」にあたるもので、海外からも強い關心が寄せられている。さらに、ジャカルタの國立公文書館とデン・ハーグのオランダ公文書館でも史料調査・収集を行ない、華僑史をはじめ、建築史、糖業史、海運史の分野からの研究發信の準備もできた。他方において、本年度は、十九世紀後半から二十世紀前半の蘭領ジャワや英領シンガポールの貿易や金融を専門にする研究者を招聘し、近世から近・現代にかけての「アジア間交易の形成と構造」を長期的かつ複眼的に理解する手がかりを提供していただいた。

第一次世界大戰の總合的研究

班長 山室信一、岡田曉生

最終年度の今年度は、本研究の四つの柱「世界性」「總體性」「感性」「持續性」をそれぞれ軸として、これまでの研究成果を總括し、さまざまな媒體を通じて成果報告を行つた。とくに、人文書院シリーズの連續合評會「第一次世界大戰を考える」（計五回）および山室信一・岡田曉生・小關隆・藤原辰史（編）『現代の起點 第一次世界大戰』全四卷（岩波書店、二〇一四年）を通じて、廣く日本社會に第一次世界大戰の歴史的意義に關する議論を廣めることに貢献した。國際的な研究活動に關しては、二〇一四年九月にベルギーのルーヴァン大學およびドイツのルール大學ボッフムにて本研究メンバーによる第一次世界大戰の國

際ワークショップが開催された。さらに、ベルリン自由大学におけるオンライン第一次大戦事典プロジェクトと京都大学人文科学研究所の間で提携を結んだ。

日本の文藝理論・藝術理論 班長 大浦 康介

最終年度にあたる平成二十六年は、本研究班の研究報告である『日本の文藝理論―アンソロジー（ベータ版）』を刊行した。本年度は、刊行に向けての準備作業を本格化し、これまで會讀してきた日本の主要な文藝・藝術理論関係の文獻にもとづき、各執筆擔當者が中間報告を行い、それについて班員全員で討論するという形式で研究會を開催した。また、夏にはリュブリャナで開かれたヨーロッパ日本研究協會（E.A.J.S.）の第十四回國際大會でラウンドテーブルを企画・開催した。さらに、北海道大学の中村三春教授および國際日本文化研究センターの坪井秀人教授をゲストとして招き、最新の研究成果を披露していただくとともに、アンソロジーへのコメントをしていただいた。

日本・アジアにおける差異の表象

班長 竹澤 泰子

どのように人種の社會的なアリティが構築されるのかを、學際的な共同研究を通じて明らかにする本研究プロジェクトは、本年度も文系・理系の研究者に議論の場を提供するために、計十三回の研究會を活動に行った。その中には、五月一七日に國際人類學民族科學連合（IUAAES）・日本文化人類學會と共同主催した國際シンポジウム

や、六月三〇日・一〇月二五日、一二月二〇日にそれぞれ主催した國際會議が含まれる。また、これまでの研究成果の一部を『BMC Medical Ethics』誌に共著論文“Human Genetic Research, Race, Ethnicity and the Labeling of Populations: Recommendations based on an Interdisciplinary Workshop in Japan”を發表した。共同研究の成果のとりまとめにも力を注ぎ、それらは、學術書シリーズ『人種神話を解體する』（第一卷 齊藤綾子・竹澤泰子編著『Invisibility 可視性と不可視性のあいだで』、第二卷 坂野徹・竹澤泰子編著『Knowledge 科學と社會のはざま』、第三卷 川島浩平・竹澤泰子編著『Hybridity 「血」の政治學を越えて』）（東京大学出版會）、Japanese Studies 特集號（Rethinking Race/Racism from Asian Experiences）、Transpacific Japanese American Studies: Conversations on Race and Racialisations (University of Hawaii Press) として二〇一五年中に刊行される豫定である。

「ブラフマニズムとヒンドウイズム」準備研究

班長 藤井 正人

本年度（第一年度）、年内の研究會では、昨年度終了した共同研究「灌頂と即位の文化史」の積み残しであるサンスクリット語新資料の英文譯注の作成作業を行った。この作業は年内の最後の研究會で終了したので、年明けの研究會から本研究課題に關する諸問題に關して班員同士で話題を提供しあつて、研究の方向性をさぐるための検討を

行う豫定である。三月には、班長を含め三人の班員が、現代インドにおける「ブラフマニズムとヒンドウイズム」との關係について、ケララ州におけるヴェーダとタントラの兩方を傳承する家系jを中心調査する豫定である。なお、本共同研究の目的と計畫に關する豫備的な報告と宣傳を、龍谷大学現代インド研究センターで行った。藤井正人「ブラフマニズムとヒンドウイズム」移行・並存・混交・相互影響」二〇一四年一月一八日。啓蒙とフランス革命―恐怖の研究

班長 富永 茂樹

本共同研究は最終年度に入つたので、成果報告書の刊行をめざして、班員各自が執筆する豫定の論文の構想の報告を行った。そこではまずはロベスピエール、サンジユストをはじめとする恐怖政治にかかわつた政治家の言説の分析をととした思想と實踐の特質、その背景とりわけ一八世紀啓蒙哲學との複合的な關係、より廣くは當時の制度・文化のなかで『恐怖』が占めた位置などを明らかにし、さらには『恐怖』とは直接つながらない、ないしはその逆の立場の政治家から見たフランス革命と恐怖政治にも配慮するなど、いくつかの多面的・總合的な視角からの研究成果を得ることができた。こうした報告は一月以降三月までなお數回なされる豫定であり、最後に全體での討論を行い、その結果を踏まえうえて、成果報告書の執筆に取りかかることとなっている。

公募型研究班

古典解釋の東アジア的展開——宗教文獻を中心課題として
 本年度は年八回の研究会を実施し、それに加えて二〇一五年二月に国際シンポジウムを二日にわたって開催した（うち一日は共催）。副班長が事故のため本年度第三回から第七回まで缺席したが、滞りなく全八回の研究会を実施した。参加者は毎回約三十名であり、分野は佛教を中心に道教・美術にいたるまでの発表があり、北は東北大学から南は熊本県立大学までの研究者が参加し、毎回の発表に對して別の専門分野の研究者がコメントを行った後に参加者全員で議論を行った。第七回目の研究会は人文研アカデミーの公開講座として開催され、参加者は總計百二十名となるなど盛況であった。研究会を通じて班員は専門分野を超えた研究に觸れることでそれぞれ自分の専門の理解をより深めることにつながった。

*括弧内はコメンテーター

四月一九日 「平常無事」の源流——中國思想との関連から 藤井 淳

（古勝隆一、小川 隆）

五月一七日 中國における佛教受容と世俗化についての事例 金 文京

（村田みお、熊谷誠慈）

七月一九日 中國における神變及び瑞像表現の展開とその機能——敦煌壁畫、『畫圖讀文』の分析を中心に 田林 啓

（稻本泰生、宇佐美文理）

九月 六日 聖胎をめぐる思想と表象の展開 金 志玖

（石井公成、内記理）

一〇月二日 理法と事法—dharma（法）概念とその展開—— 齋藤 明

（馬場紀壽、中西龍也）

十一月 八日 佛教では「心」をどうとらえてきたか——漱石「こころ」発表百年の今、古典に描かれた「心」を再考する

室寺義仁、小川 隆、石井公成

中國における佛教經典の注釋書について——南北朝・隋代を中心として—— 菅野 博史

（古勝隆一、戸次顯彰）

二〇一五年一月六日

六祖慧能関連資料における經典利用について 齋藤 智寛

（Ch.ウィットェルン、松岡寛子）

二月一四日 中國佛教研究におけるいわゆる「中國化」をめぐる問題について Michael Raich Victor

韓國佛教における性起と緣起

崔 鉉植（倉本尚徳）

環境インフラストラクチャー——自然、テクノロジー、環境變動に關する比較研究

班長 森田 敦郎

共同研究プロジェクトの二年目である本年は、

五月と三月に開催した国際シンポジウムとワークショップを核として、國內・海外の共同研究者の研究発表を活潑に行った。五月一四日に開催したワークショップ（Environmental Infrastructures: Joint-Workshop with the Indigenous Knowledge and Modern Science Project）¹⁾、University of Copenhagen の Anders Blok²⁾、大阪大学の森田敦郎、京都大学の菅原和孝がそれぞれ研究発表を行った。また、森田敦郎と石井美保は、七月三一日から八月三日にかけてエストニアのタリン大学で開催された European Association of Social Anthropologists 研究大会において、「Intinacies of Infrastructure」（Convenors: Penny Harvey (University of Manchester); Asuro Morita (Osaka University)）と題したパネルで発表を行った。通常の研究会としては、一〇月一八日に大阪大学の古川不可知がネパールのヒマラヤ登山とシェルパについて、また一橋大学の難波美藝がラオスの鐵道計畫についてそれぞれ発表を行った。二月一五日には基盤研究A「在來知と近代科學」プロジェクト（代表：大村敬一・大阪大学）との合同研究会を開催し、京都大学の中谷和人がデンマークにおけるオール・ブリュットと政治について発表を行った。二月一四日には、國際ジャーナル Ethnos の特集（「Infrastructure as Ontological Experiments」）の一部をなす、森田敦郎と石井美保の二論文の合評会を行った。三月六日と七日には、基盤研究A「在來知と近代科學」プロジェクト、ならびにト

ロント大學と共催の国際シンポジウム (Politics of Environmental Knowledge: Encounters between Indigeneity and Modernity) の開催をした。

班長 大谷 榮一

日本宗教史像の再構築
本研究班は既存の宗教史研究の「近代主義的」なバイアスを解きほぐし、それによって不可視化されていた事象に光を當て、新たな日本宗教史像を構築することをめざします。

まず、學問の思想史ないし學問の社會史というべきアプローチによって、既存の日本宗教史像を支えてきた諸研究の時代的制約を徹底的にあぶり出す作業に取り組みます。

また、日本宗教史について宗教學、歴史學、社會學、民俗學など、さまざまな實證的研究の立場から、既存の宗教史像の視角や脱落を指摘していく作業も行うことで、日本宗教史像の思想的・社會史的再検討と實證的宗教史研究とを架橋し、その生産的對話の場を構築することを試みます。その成果にご期待ください。

東アジア傳統醫療文化の多角的考察

班長 大形 徹

東アジア傳統醫療の全體像とその文化的特色を構造的に把握するために、醫者、鍼灸師、藥劑師、醫學史研究者に加えて諸領域の人文學研究者を結集して研究集會を開催し、多彩なゲストスピーカーによる特別講演、班員による研究発表や『醫心方』の會讀を行った。

本年度に取り上げた研究課題は、美容術における鍼灸醫術、臨床から見た經穴説、煉丹術の身體

技法、喫茶文化と養生などであり、著名な醫學史家を特別講師に招いて傳統醫學研究の最前線と今後の課題を討議した。二〇一四年七月二一―二三日に韓國科學技術院 (K A I S T) の申東源副教授を招聘して國際ワークショップ (總合テーマ「東醫寶鑑に見る日韓醫學交流」) を開催し、特別講演、研究発表や附屬圖書館富士川文庫の調査、眼科・外科歴史博物館の見學を行った。また、社會啓蒙活動として、十一月一―三日に京都半井家、京都醫學史研究會等と協力して護王神社護王會館にて京都醫學史展二〇一四 (第二回醫療文化サロン展) を主催し、『醫心方』関連資料を中心とする展示を通して傳統醫學の歴史と現代的意義をアピールした。

五月一〇日 美を採る醫術

美容醫術に關する東西文獻選讀

武田 時昌

中國傳統醫療文化における鍼灸と美容の共生 王 財源

ルネサンスの美人論―15・16世紀の西洋肖像畫に見られる美人觀の變遷 中江 彬

七月 六日

醫學史研究の最前線 (1)

恥さらしの私の人生―出版から

奥澤 康正

討論會「氣の流れ―身體技法のコスモロジー」

『入藥鏡』と煉丹術の原理

加藤 千恵

七月二三日

第一回傳統醫療文化國際ワークショップ「東醫寶鑑に見る日韓醫學交流」

東醫寶鑑の日本的受容

吉田 和裕

東醫寶鑑と東アジア

申 東源

九月 七日

醫學史研究の最前線 (2)
日本における本草書の評価―正倉院藥物等の調査から

米田 該典

討論會「經穴とはなにか」

思うツボ―經穴探しの手法と實踐

戸ヶ崎正男

一〇月五日 黃帝內經の新研究

眞柳 誠

二月二一日 中國喫茶文化考

關 劍平

二〇一五年一月一日

吉益東洞の新研究 横山 浩之

東アジアの「醫」の聖典 東アジアの「醫」の聖典

特別講演會「東アジア傳統醫學の源流」 武田 時昌

日本醫學はかく始まった―醫心方の時空 小曾戸 洋

朝鮮の鄉藥傳統と『東醫寶鑑』 安 相佑

シンポジウム「日本殘存古醫書の來し方行く末」

韓醫學の現状と發展の方向性

金 南一

中國古醫籍の日本的受容―中韓
越との比較から 眞柳 誠『醫方類聚』の刊行前後における
朝鮮醫學の諸様相

申 東源

(コメンテーター 酒井シヅ)

(司會 大形 徹)

ヨーロッパ現代思想と政治

班長 市田 良彦

今年度、本研究班では計八回の研究会を行ない、計四回の公開講演會・公開セミナーを開催した。研究最終年度にあたる今年度、研究会はもっぱら共同研究の最終報告書となる論文集を來年度中に公刊することを目指して、班員の研究論文の構想を發表し、その内容を全員で検討することにあてられた。その際、共同研究の三つの主要な問題系となるマルクス主義（政治と經濟・歴史の關係という問題）・精神分析（構造と主體／主體化という問題）・政治哲學（とくに代議制民主主義を規範化する一連の現代政治理論との對質）を念頭に、論集全體の構想を練り上げている。また、十一月一三日には桂秀實とハリー・ハルトウニアンを招いた日本資本主義論争をめぐるシンポジウム、十一月四日にはクリスティン・ロスを招いたパリ・コミュニケーションについての講演會を開催、さらに一月一二日には、市田良彦、エティエンヌ・パリアル、ブルーノ・ボステイルスを講師として、本研究班の締めくくりを飾る國際シンポジウム

『政治・主體・〈現代思想〉』を組織した。また、

一月一七日には、上田和彦、佐藤淳二、佐藤吉幸ら班員と、ガブリエル・ラディカ、およびパリアル本人が討議する研究会「われわれ」がエティエンヌ・パリアルの讀解に負うもの」を開催し、現代政治哲學の諸問題について、實り多い議論を行なうことができた。

人文學研究資料にとつてのWebの可能性を再探
する

班長 永崎 研宣

二〇一四年度は、五回の研究会と三回の公開シンポジウムを開催した。研究会では、主に、人文學におけるWebの活用に関わる技術面・運用面について、公開しにくい内容も前提とした上で議論を行ない、班員全體として、Web活用に関わる知見を深めた。ここでは主に、歴史學、文字學、チベット學、フィールドノートにおける活用事例を採り上げた。さらに、日本のWeb資料の國際的な発信と、それを受ける側の北米の大學圖書館の状況についての情報共有と議論も行なった。また、公開シンポジウムにおいては、廣く知られるべき事項を採り上げ、積極的な議論を行なった。ここでは、漢字資料のデジタル化とWeb公開、ローカルな組織における效率的なデータのWeb公開手法、Webアーカイビングと情報共有に関する問題について扱った。さらに、各研究会を通じて、最終的な研究成果を公開するためのより適切な手法とその具體的な内容についての検討を行なった。

四月二十八日（第一回）

昨年度の回顧と今年度の計畫

永崎 研宣

東京大學史料編纂所の取組み

山田 太造

全體ディスカッション

(司會 永崎研宣)

五月二六日（第二回）

OTDOについて 松田 訓典
ディスカッション…関連分野の
日本語論文誌發刊の意義と可能性について (司會 永崎研宣)

六月二三日（第三回）

拓本文字データベースについて

安岡 孝一

人文學資料のためのモバイルア
プリ開發について 橋本 雄太
全體ディスカッション

(司會 永崎研宣)

八月 五日

公開シンポジウム「漢デジ

タル…デジタル翻刻の未來」

平安時代漢字字書總合データ

ベース―現状と課題 2014 夏―

池田 證壽

人文學資料とLOD

大向 一輝

UCS符號化という觀點からの

『慧琳撰一切經音義』の検討

王 一凡、永崎研宣、下田正弘

米國議會圖書館本源氏物語の翻

字と畫像公開について

高田 智和

デイスカッション(司會 永崎研宣)

一〇月一七日(第四回)

地域研究とWeb

フィールドノートのデジタル化について 山田 太造

十一月二七日(第五回)

成果物出版についての検討

永崎 研宣

公開シンポジウム…京大DHネットワークの形成に向けて

DHとは何か?—DHがもたらし得るものとネットワーク形成の重要性を中心として

永崎 研宣

研究者コラボレーションのための情報基盤—Myデータベースを中心に— 原 正一郎
全體デイスカッション…京大DHネットワーク形成に向けて

(司會 永崎研宣)

十二月二二日(第六回)

人間文化研究機構の国際リンク集について 後藤 眞

米國圖書館と日本文化研究

横田カーター啓子

成果物公開に向けての検討

二〇一五年三月一八日

(司會 永崎研宣)

國內外のDH連携と京大DHの可能性

人間文化研究機構の情報技術による機關連携と國際リンク集

後藤 眞

京都大學研究資源アーカイブの活動と京都大學デジタルアーカイブシステム

五島 敏芳

國文學研究資料館のデータベース

古瀬 藏

デイスカッション (司會 永崎研宣)

個人研究

東方學研究部

敦煌寫本の言語史的研究

高田 時雄

中國古代中世の法制

富谷 至

中國の小説、演劇及び説唱文學の歴史

金 文京

清代の文化と社會

井波 陵一

中國科學の思想史の考察

武田 時昌

近代中國の財政と社會

岩井 茂樹

先秦時代の金文

淺原 達郎

古代中國の考古學研究

岡村 秀典

イスラーム東漸史の研究

稲葉 穰

インド・中國における佛教の學術と實踐

佛教研究知識ベース—禪佛教を例として

船山 徹

WITTEN Christian

川西走廊の漢藏諸語の記述言語學的研究

池田 巧

中國共產黨史の研究

石川 禎浩

文字コード理論

安岡 孝一

秦漢時代の制度史

宮宅 潔

高麗官僚制度研究

矢木 毅

中國注釋學史研究

古勝 隆一

華南沿海の社會經濟制度の變容

村上 衛

東アジア佛教美術史の研究

稲本 泰生

中國中世近世の文學理論

永田 知之

文字定義情報に基づく文書表現系に關する研究

守岡 知彦

中國古代中世の官制史

藤井 律之

モンゴル時代の文化政策と出版活動

宮 紀子

明代後期北虜南倭時代の中國社會

山崎 岳

中國家具とその使用に關する研究

高井たかね

中國北魏時代の佛教石窟寺院

安藤 房枝

中國古代における領域支配の研究

土口 史記

人文學研究部

近代東アジアにおける日本の法と政治

山室 信一

フランス革命と近代的主體の成立

富永 茂樹

近代朝鮮の政治と社會

水野 直樹

在日米軍を中心とする軍事共同體の人類學的研究

文学理論の研究	田中 雅一
ヴェーダ文献の生成と傳承の研究	大浦 康介
人種・エスニシティ論	藤井 正人
戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク	竹澤 泰子
近代天皇制の文化史的研究	龍谷 直人
音楽におけるロマン派とメロドラマ的音楽	高木 博志
近代日本の藝術と西洋	岡田 暁生
19世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム	高階繪里加
近世ヨーロッパの歴史敘述と政治思想	小關 隆
幕末期の畿内・近國社會	王寺 賢太
精神分析的知を思想的に位置づける試み	岩城 卓二
ザガフカスの「義賊」と戦争	立木 康介
南インドにおけるプータ祭祀に關する人類學的研究	伊藤 順二
東アジアにおける生命科學と「自然」	石井 美保
農業史の再構築	瀬戸口明久
島崎藤村その他の近代文學者の作品研究—リアリズム、メディア、帝國	藤原 辰史
近代日本民俗誌システムの研究	HOLCA, Irina
近代西洋醫學發展史研究および身體論	菊地 暁
再構築されるオリシャ崇拜—異なる「人種・宗教」をとりこむアフリカ系アメリカ人の社會運動—	田中祐理子

事業概況

・三研究所合同シンポジウム	（東方學研究部關連事業）
一月二四日（本館四階大會議室）	
東アジアから世界史を見る／考える	
・第一部「前近代の東アジアから見た世界」	小池 郁子
山崎 岳、黒田明伸、金 慶浩	
・第二部「近代東アジアと世界」	藤井 俊之
（チン・ジェギユ、小寺 敦、村上 衛）	小川佐和子
羽田 正、龍谷直人、チョン・ウテク	小野 容照
（宮島博史、大木 康、岩井茂樹）	
・研究セミナー	
三月一四日（分館・大會議室）	
第二五回研究セミナー「東洋學へのコンピュータ利用」	
・國際化ドメイン名における「堺」と「界」	安岡 孝一
・比較的最近のCHISE	守岡 知彦
・時間情報を取り扱うための課題の整理を試みる—日本史資料を題材に—	
・日本南北朝期古記録テキストを用いた潜在的トピックの検出と時系列變化	
山田 大造、野村 朋弘、井上 聰	
・Conventions for a repository of premodern Chinese texts	
Christian Wittern	
・東洋學のツールとしての翻ジニ〇一四における諸課題	永崎 研宣
・TOKYO 漢籍 SEMINAR	
三月一七日（學術總合センター・一橋講堂中會議場）	
木簡と中國古代	
・中國西北出土木簡概説	富谷 至
・年中行事における官と民	目黒 杏子
・木札が行政文書となるとき	土口 史記
・夏期公開講座（人文研アカデミー）	
七月一二日（本館一階共通一講義室）	
名作再讀—いま讀んだらこんなに面白い（8）	
・絶滅と創造の想像力	瀬戸口明久
ハラルト・シュテュン	
プケ「鼻行類」	矢木 毅
くずし字で讀む朝鮮の歴史	木村理右衛門「朝鮮物語」
鮮物語	淺原 達郎
周公の祈り	金藤「書經」
・高校生のための夏期セミナー	
八月 八日（分館・大會議室）	
漢字文化への誘い 第二回「書き取りだけが漢字じゃない—」	
・平林（タイラバヤシ）か、平林（ヒラリン）か—漢字の屬性と戯れる	井波 陵一

・漢文博士が愛した数式―漢文での算数

武田 時昌

・連続セミナー（人文研アカデミー）

雲岡石窟からみた佛教文化の東傳

一〇月 九日 雲岡石窟の調査と研究

岡村 秀典

一〇月一六日 ガンダーラにおける佛像の出現と

變容 内記 理

一〇月二三日 雲岡から龍門へ―北魏佛教美術の

變容 稲本 泰生

一〇月三〇日 雲岡から飛鳥へ

田中 健一

・公開講座

一二月八日（本館・大會議室）

佛教では「心」をどうとらえてきたか

・無心の心から心を捉える インド佛教の思潮

室寺 義仁

・無心の心から無事へ―中國の禪 小川 隆

・古代日本人の「こころ」の自覺と佛教

石井 公成

（司會 藤井 淳）

・國際學會

二〇一五年一月二九日、三〇日（京都大學百周年時計臺記念館2F 國際交流ホールI、II）

敦煌學國際學術研討會

・TOKYO 漢籍 SEMINAR

二〇一五年三月一六日（一橋大學一橋講堂中會議場）

清玩―文人のまなざし

・古鏡清玩―宋明代の文人と青柳種信

岡村 秀典

・李漁の「モノ」がたり―『閒情偶寄』居室・器玩部より

・利他と慈悲のかたち―松本文三郎の佛教美術

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・金文京教授【記録映畫】上映會と講演會

二〇一五年三月一四日（本館・セミナー室I）

【記録映畫】最後の吉原藝者 四代目みな子姐さん―吉原最後の證言記録―

・東アジア人文情報學研究センター講習會

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（初級）

第五日（一〇月三日）

朝鮮本について

矢木 毅

實習解説

土口 史記

情報交換

井波 陵一

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

・二〇一四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

所員動靜

・高田時雄教授（東方學研究部）は、早期退職（三月三十一日付）。

・小野寺史郎助教（附屬現代中國研究センター）は、辞任の上（三月三十一日付）、埼玉大學教養

學部准教授就任。

。村上衛准教授（東方學研究部）は、附屬現代中國研究センターに配置換（四月一日付）。

。藤本幸夫麗澤大學客員教授は、客員教授（文化研究創生研究部門、四月一日～二〇一五年三月三十一日）。

。JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス國立極東學院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一五年三月三十一日）。

。武上眞理子 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附屬現代中國研究センター、四月一日～二〇一五年三月三十一日）。

。VITA, Silvio 京都外國語大學教授は、特任教授（四月一日～二〇一五年三月三十一日）。

。HOLCA, Irina を講師（人文學研究部）に採用（十一月一日付）。

。金文京教授（東方學研究部）は、早期退職（二〇一五年三月三十一日付）。

。富永茂樹教授（人文學研究部）は、定年により退職（二〇一五年三月三十一日付）。

招聘研究員

。劉 恒武 寧波大學教授
前近代の日中交流史

（文化連關研究客員部門）

受入教員 富谷教授
期間 二月一五日～八月一四日

。徐 興慶 臺灣大學教授

近代日本の中の後期水戸學―思想史からのアプローチ―

（文化生成研究客員部門）

受入教員 山室教授
期間 六月一六日～九月一五日

。任 城模 延世大學副教授

第一次世界大戰後における帝國改造論の日・朝思想連鎖

（文化連關研究客員部門）

受入教員 山室教授

期間 八月一五日～二〇一五年二月一四日

。LACHAUD, François Gilbert フランス極東學院教授

變革期における宗教の政治的・社會的役割…比較研究の試み

（文化生成研究客員部門）

受入教員 富永教授

期間 九月二〇日～十二月一九日

。金 秉駿 ソウル大學教授

秦漢時代における「縣」設置過程の復原
（文化生成研究客員部門）

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一五年一月五日～七月四日

招聘外國人學者

。王 健 上海社會科學院歷史研究所副研究員

邪教淫祠の破壊からみた明清時期中國の國家權力と民間信仰の相互作用

受入教員 岩井教授

期間 三月一日～八月三十一日

。李 成九 蔚山大學校・人文大學教授

中國古代における楚の巫文化

受入教員 宮宅准教授

期間 二月七日～二月二五日

。NIELSEN, Bent コペンハーゲン大學准教授

中國古代學術思想史―識緯思想の研究

受入教員 富谷教授

期間 九月一日～十一月三〇日

。姜 明淑 培材大學校教職部副教授

日本植民地支配後期における朝鮮教育政策研究

受入教員 水野教授

期間 九月一日～二〇一五年八月三十一日

。許 榮恩 大邱大學校・人文大學教授

日中古典文學の比較研究…特に女性の役割をめぐって

受入教員 井波教授

期間 七月一五日～二月二五日

。NGUYEN, To Lan Vietnam Academy of Social Sciences, Researcher Fellow

東アジアにおける「三國志演義」の翻譯

受入教員 金教授

期間 一〇月二日～十一月一日

。水野 宏美 ミネソタ大學歷史學部准教授

二〇世紀日本の化學肥料の歴史

受入教員 藤原准教授

期間 一二月二八日～二〇一五年七月二日

。韓 程善 高麗大學校國際學部准教授

日本帝國と専門新聞記者の誕生、一九〇五—一九三七

受入教員 山室教授

期間 二〇一五年一月六日～六月三〇日

。漆 麟 西南大學美術學院講師

日中戦争期におけるモダンイズム美術の諸相

受入教員 石川教授

期間 二〇一五年一月四日～二〇一六年一月一四日

。葉 純芳 北京大學歴史學系（中國古代史研究中心）副教授

『周禮正義』の書誌學的考察及びその索引提要の編纂

受入教員 武田教授

期間 二〇一五年三月一日～二月三十一日

外國人共同研究者

。POLFUS, Jonas ミュンスター大學非常勤講師

唐代の文學と法制

受入教員 富谷教授

期間 二〇一四年三月一日～三月三十一日

。TAJAN, Nicolas Pierre

中學生の不登校の日佛比較研究

受入教員 立木准教授

期間 四月一日～二〇一五年三月三十一日

。崔 在馥 國史編纂委員會（歴史振興室）編史

韓日佛教關係研究

韓日佛教關係研究

受入教員 矢木准教授

期間 四月一〇日～二月九日

。SCHERRMANN, Sylke Ullrike

青島舊藏ドイツ語文獻中の法制關係資料の調査

受入教員 岩井教授

期間 五月二五日～二〇一五年三月三十一日

。林 佩瑩 エルサレム・ヘブライ大學東洋學部博士研究員、東洋學非常勤講師

末法時代の祖師像—聖德太子と南嶽慧思傳について

受入教員 ウィッテルン教授

期間 七月一日～一〇月六日

。尹 寧實 University of Toronto, East Asian Studies Department Postdoctoral Researcher

戦時期植民地朝鮮における内鮮一體論と民族超克論・崔南善を中心にして

受入教員 水野教授

期間 八月一日～二〇一五年六月三〇日

。李 怡文 イェール大學歴史學部博士課程學生

日中貿易における寺社と商人、九〇〇—一五五〇年

受入教員 岩井教授

期間 九月二〇日～二〇一五年五月三十一日

。BATRAM, Anja ボーフム・ルール大學專任講師

日本近世における神社の社會史

受入教員 岩城准教授

期間 一〇月二日～二〇一五年九月三〇日

。鄭 琮樺 韓國映像資料院韓國映畫史研究所專任研究員・慶熙大學演劇映畫學科兼任教授

植民地近代の日本・朝鮮映畫交渉に關する歴史的研究

受入教員 水野教授

期間 十一月二五日～二〇一六年三月三十一日

外國人研究生

。ANTON, Alina Elena

日系アメリカ人や日系カナダ人の文化とアイデンティティ

受入教員 竹澤教授

期間 四月一日～二〇一六年三月三十一日

。JENSEN, Christophe Jon

夢の内容と現實の生活：東アジア中世佛教における夢の物語

受入教員 船山教授

短期交流學生

。游 秋玫

中國陶磁史研究

受入教員 岡村教授

期間 一〇月一日～二〇一五年九月三〇日

。林 思婷

A Study of Guangzhou City-God Temple in Modern Period

受入教員 ウィッテルン教授

期間 一〇月一日～十一月三〇日

。李 秀偉

任研究員・慶熙大學演劇映畫學科兼任教授

植民地近代の日本・朝鮮映畫交渉に關する歴史的研究

受入教員 水野教授

期間 十一月二五日～二〇一六年三月三十一日

外國人研究生

。ANTON, Alina Elena

日系アメリカ人や日系カナダ人の文化とアイデンティティ

明清江南演劇と民間信仰研究

受入教員 金教授
期間 一月一日～二月三十一日

出版物

(ベータ版)

二〇一五年三月三十一日刊
東洋學へのコンピュータ利用第二六回研究セミ
ナー

二〇一五年三月二〇日刊

紀要

東方學報 第八九冊(紀要第一七五冊)

二〇一四年二月二〇日刊

東洋學文獻類目二〇一一年度

二〇一四年三月一〇日刊

東洋學文獻類目二〇一二年度

二〇一五年三月一〇日刊

人文學報 第一〇五號(紀要第一七四冊)

二〇一四年六月三〇日刊

ZINBUN number44

二〇一四年三月刊

ZINBUN number45

二〇一五年三月刊

研究報告その他

武田時昌編 術數學の射程―東アジア世界の
「知」の傳統

二〇一四年三月一〇日刊

所報人文 第六一號

二〇一四年六月三〇日刊

富谷至編 漢簡語彙考證

二〇一五年一月二九日刊

大浦康介編 日本の文學理論―アンソロジー